

No. 25

MEIJI GAKUIN UNIVERSITY

発行

2011年9月15日

明治学院大学
社会学部附属研究所

〒108-8636

東京都港区白金台1-2-37

TEL (03) 5421-5204~5

所長 北川 清一

研究所だより

大震災の中で迎えた春 ～研究所からのご挨拶～

所長 北川 清一



二〇一一年
三月一日に

遭遇した東日
本大震災は、
研究所として

したい。

も新たな社会的役割や自らの立ち位置を
を検討する契機となった。国道一号线
を目の前にする立地に配置されている
研究所であるが、その日は夕暮れ時に
なると車道が車で渋滞し、歩道は徒歩
で帰宅されようとしている人びとであ
ふれていた。トイレの借用を求めて玄
関ドアをノックされた方々への研究所
ソーシャルワーカーによる迅速な対応
は、帰宅難民状態にあった方々に大学
設備を一部開放する判断へと繋がった。
マニュアルの想定にない事態への対処
を求められた場面で、当研究所が地域
と共にあることを運営理念 (mission
statement) としてきたそれについて、

スタッフが状況に応じて自ら判断し具
体的な行動に移された実践力の高さに
敬意を表するとともに、豊かな構想力
を持つスタッフの存在は我々の誇りと

このほかにも、ささやかであるが研
究所として一定の貢献ができた。求め
がない限り自らを語らないことが研究
所の伝統となつているが、人々の視線
と常に交叉する取り組みを希求してき
た当研究所らしい取り組みを行えたこ
とについて、研究所責任者として広報
できる環境を整えてみたい。詳細は調
査・研究部門および相談・研究部門か
らホームページを通じて報告している
が、復興への途なお厳しい状況が続く
中で、被災者一人ひとりの歩みの歩幅
を確かめながら、見返りなどを求めな
い息の長いかわりを模索してみた
い。

この間に仕事で一緒にいた岩田正美
日本女子大教授の震災支援にまつわる
コメントは興味深いものであった。震
災直後は、社会階層の異同を越えて、
多くの市民が共通して家を失い、墓を
失い、がれきの山になった郷土を見な
がら、地域全体が大きな喪失感に包ま
れていた。しかし、二ヶ月が過ぎた

(政府主導の復興ビジョンがまとまる
見通しが立たない) 頃から、自力で復
興に取りかかり始めた住民と、全てを
喪失し生活再建の力を生み出せない住
民との間に歴然とした「差」が明確に
なりつつある。当初行ってきた全ての
住民に対する「フラット」な支援では、
やがて不十分な状況が生起する。社会
科学分野からの支援も、実態として浮
上している事情や状況の「個々別性」
に配慮を欠いたままならば、生活者の
日常性を無視した自らの存在理由の否
定にも繋がりがかねないことになる。想
定外の事態であったが、社会福祉学と
しての立ち位置そのものがこれまでに
なく厳しく問われる事態に直面してい
ることの自覚に立ち、今後の支援のあ
り方を検討すべきというものであつ
た。社会科学の方法は、人びとの暮ら
しの日常性といかにもっともらしい関
係性を構築するかにあつたことを想起
してみた。

困難な時期と重なつたが、教学補佐
等の退職に伴い、研究所は新しいス
タッフを二人迎えることになった。ま
た、無給の身分であるが研究員として
これまでになく多くの研究者を迎え入
れている。厳しさに包まれた春であつ
たが新しい息吹を感じ取っている。

研究所各部門から

調査・研究部門

昨年度より、特別推進プロジェクト「現代日本の地域社会における（つながらり）の位相——新しい協働システムの構築に向けて——」がスタートし、社会学科、社会福祉学科、調査・研究部門、相談・研究部門の枠を超えて多様なスタッフが集結し、研究活動が繰り広げられている。昨年度は、港区を対象として大規模な標本調査を実施した。昨年度末からデータクリーニングなどの作業を開始し、本年六月現在、単純集計を共有し、各メンバーが独自に分析作業に着手するに至っている。また、この特別推進プロジェクトについては、本年度より学術研究振興資金より研究助成をいただけることとなった。この助成金を活用し、本年度は、鹿児島県佐多岬に位置する南大隅町にて、調査を行う計画をたてている。その準備として、昨年度末の二月に南大隅町においてフィールドワークを行い、現地キーパーソンとの関係構築などの準備を行ってきた。

いよいよ佐多調査に向けて忙しくなると予想していた本年三月。東日本大震災によって、日本社会全体が大きく揺さぶられた。昨年四月より、浅川が本学ボランティアセンター長補佐を兼務していたことから、調査・研究部門も、ボランティアセンターと歩調を合わせながら、被災地に対する支援活動を模索することとなった。ボランティアセンターでは、震災直後から、被災地での支援および被災地から避難してきた方に対する支援の両面から、支援活動を検討していた。そして四月後半の三週間、岩手県大槌町にてボランティア活動をを行った。この活動に際して、浅川と研究調査員の石井さん、相



談・研究部門の明石先生が同行し、ボランティア活動に従事しつつ、同時に、被災地が復興に向かうまでの記録を蓄積することを試み始めている。震災直後の被災地が、一歩ずつ復興に向かつてゆくその歩みをつぶさに記録することによって、復興のための貴重な資料となることを願っている。

（調査・研究部門主任 浅川達人）

相談・研究部門

この部門に所員として関わったことが一度、そして今年度で主任二年目であるが、着実な歩みが続けていることに、正直驚きを感じる（ひとえにスタッフの皆さまのお蔭です）。

地域こぞつて子育て懇談会をメインイベントとした活動は、港区の委託も受けながら、様々に広がり、かなり活気づいてきた。参加している住民の方々の力が引き出され、盛り上がりを見せているのを見ると、こちらも知らないうちに元気を貰う。

今年七月だけでもかなりの事業が催された。市民講座、ネットワークショップ、活動スキルアップ講座等々である。多くは子育て懇談会に関わるものだが、「子育て」が中心でありつつも、テ

マに広がりが出て来ていることを感じる。

市民講座は「隣人祭り」がテーマで、子育て支援を超えたコミュニティづくりを目指したものである。また、シニア層との関係を子育て支援に関心のある人達が「取り持つ」働きを通して、よりよいコミュニティを作ろうという動きも出てきた。

課題はどこで市民の方たちの力に任せて、研究所としては退くことかなあ、と言う話を今年度初めにスタッフでしていた。勿体ない話なのだが、ソーシャルワーク実践としてある限り、そういうことにいずればなる。

最後に震災について書かせていただくが、ささやかな支援として相談部門



では、「地球の楽好」という団体の方々を通じて、被災地に絵本を送らせていただいた。住民の方々が積極的に絵本を集めて下さり、作業も担当して下さった。被災地への祈りと共に、協力して下さった方々への感謝を送りたい。(相談・研究部門主任 深谷美枝)

学内学会部門

本年度も「社会学・社会福祉学会(通称学内学会)」の教員サイドの総括を担当することになりました。どうぞよろしくお願いいたします。

昨年この欄に記しましたが、このところの「学内学会」は以前とくらべ多面的かつ充実した活動を展開しているのではないかと自負しております。とくに「学生部会」主催の催しは活発で、昨年一二月の講演会(講師永井均氏)には一〇〇名以上の聴講者を獲得し、また、今年度最初の行事であるスポーツ大会には、大震災の影響で授業開始の時期が連休明けと遅れ、喧伝・周知の期間が短かったにもかかわらず昨年度とさほど変わらない一六一名の学生諸君の参加をえて成功裏に終わりましたようです。昨年度役職の学生諸君の労に感謝するとともに、新一年生をはじめ多くの学生諸君が学生部会に参加

し、その活動を通じて良き大学生活の思い出をつくられることを祈っております。

学生部会の活況にくらべ卒業生部会の強化という「宿題」は未解決のように思われます。一昨年の総会で(1)卒業生部会に若い層を取り込む方策の必要性、(2)卒業後五年、一〇年のゼミ生を学内学会の活動に結びつける働き、(3)退職教員および卒業生から選ばれる「名誉会員」制度の検討、などの意見が出されたと報告されております。どうか卒業生部会の運営委員会などで、これらの意見の具体化に向けてさらなる議論を集約していただけたらと思っております。教員サイドとしても、でき



るだけ支援できたらと考えております。

さて「学内学会」が現在の形になって昨年で二〇年、この六月二十五日には記念の会を開催しました。今回は、例年以上に多くの社会学部卒業生に「会報」をお送りし、記念の会への参加を呼びかけました。さいわい多くの参加者をえて、社会学部の歩みを振り返りながら、「学内学会」の今後のあり方を語りあう機会になったように思われます。

(学内学会部門主任 松井 清)

新メンバー挨拶

学内学会部門で企画担当となりました。昨年後半は交換教授でアメリカのホープカレッジに行つて、年末に帰ってきました。かなり前に学内学会の委員でしたが、またお世話になります。今では定着した学生のスポーツ大会も実は私の発案でした。私はサッカー、野球、テニスをはじめスポーツ好きなので、何かスポーツの交流がしてみたいと思つています。学内学会も以前より最近活発になったと思ひ嬉しいで

部の社会福祉学科はコース制導入後完成年度を迎え、新しいカリキュラムで今までとちよつと変わった学生が卒業していきます。卒業生の皆様、どうぞ、いつまでも暖かく後輩を迎えてください。特別休暇の村上先生を継いで一年任期ですが、私も微力ながら、楽しみながらがんばりますので、宜しくお願ひします。(岡 伸一)

四月より六年ぶりに相談・研究部門の所員として戻ってまいりました。この間、社会勉強をしてきたと言いたいのですが。以前に較べ、相談・研究部門の活動内容は子育て支援を中心に、より広く身近な地域との連携を意識した活動になっていて、その経緯を理解するところから始まりそうです。地域に広がった相談・研究活動をより実りあるものにするために、地域住民・関係者の希望や思いをできるだけ活動に取り入れられるようにしていきたいと思つています。

更にはニュース性のあるホットな話題を取り入れつつ「社会福祉実践家のための臨床理論・技術研究会」等の企画にかかわらせていただき、多くの学びを楽しみつもりです。

どうぞよろしくお願ひいたします。

(八木原律子)

市民講座報告

二〇一〇年度も港区地域こぞって子育て懇談会（以下、懇談会）を港区立子ども家庭支援センターと共催しました。港区内のママ&パパ二〇名以上が企画に関わり、それまでの積み重ねを踏まえながら、一〇回以上のセッションをもち、「まちの中に、あなたや子どもの居場所ありますか？」と投げか

けました。人と人・人と場や情報等々がうまくつながり、まちの中に居場所が得られるためには、「仲をとりもつ人」の存在が大事だねと、当日は子育て当事者自らが「仲をとりもつ人」を担う活動の報告や、まちの人たちと知り合える居場所アイデアの提案をしました。参加者との井戸端会議では、求められる子どもと大人の居場所イメージやその

第25回 社会福祉実践家のための臨床理論・技術研修会
総合テーマ「災害とソーシャルワーク実践」

日時：2011年10月22日(土) 10:00~17:00
①基調講演 10:00~11:45
②ワークショップ 13:00~17:00
会場：明治学院大学白金キャンパス

基調講演：「被災地での心のケアをめぐる ― 専門家の役割とは ―」

講師：国立国際医療研究センター エイズ治療・研究開発センター
臨床心理士 飯田敏晴

ワークショップ

A 「障害者雇用の現場から～緊急時の安心・安全を考える～」

講師：株式会社博報堂 DY アイ・オー チーフ 長谷川雅之
コーディネーター：明治学院大学 八木原律子

B 「避難所における支援～支援の展開と課題～」

講師：東京社会福祉士会 災害対策本部
コーディネーター：明治学院大学 深谷美枝

C 「被災者の心にどのように向き合うか
～サイコロジカル・ファーストエイド～」

講師：国立国際医療研究センター エイズ治療・研究開発センター
臨床心理士 飯田敏晴
コーディネーター：明治学院大学 明石留美子

連絡先

明治学院大学社会学部附属研究所
〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37
Eメール issw@soc.meijigakuin.ac.jp
TEL 03-5421-5204・5205 FAX 03-5421-5205

ためのアイデア・課題が挙げられ、それらをアクションプランに移そう！が次なる展望となりました。

二〇一一年度前半は、顔見知りを増やせる取り組みである、フランス発祥の『隣人祭り』の発想を学ぶ市民講座を七月九日(土)に、懇談会から産まれた子育て支援機関/団体の情報交換と交流の場「地域こぞってネットワーク会議」を七月二二日(金)に開催しました。二〇一一年度懇談会は、二〇一二年一月二八日(土)開催予定です。

二〇一一年度
社会学部附属研究所
プロジェクトの紹介

★一般プロジェクト

☆会話分析の技法の普及と深化 (代表 西阪 仰)

☆労働問題研究と教育研究の交錯 (代表 西阪 仰)

「政策学」から「経済学」へ

☆熟議デモクラシーにとつてのインターネットの役割 (代表 稲葉振一郎)

☆ステップファミリー研究セミナー企画——アメリカと日本の比較検討 (代表 宮田加久子)

☆キリスト教専門職のスピリチュアル (代表 野沢 慎司)

☆キリスト教専門職のスピリチュアル

ケア実践における宗教性の問題 (代表 深谷 美枝)

★特別推進プロジェクト

現代日本の地域社会における(つながり)の位相——新しい協働システムの構築にむけて

二〇一一年度
社会学部附属研究所
スタッフの紹介

所長 北川 清一
調査・研究部門主任 浅川 達人
相談・研究部門主任 深谷 美枝
学内学会部門主任 松井 清
所員 明石留美子
石原 俊
大瀧 敦子
岡 伸一
西阪 仰
半澤 誠司
八木原律子
石井大朗
大橋 未緒
平野 幸子
坪井 栄子
天野 真希
佐々木敬子

研究調査員(調査・研究部門) 研究調査員(相談・研究部門)
副手
教学補佐
事務担当
学内学会部門事務担当